

東京納税貯蓄組合総連合会会長賞

『じーちゃんが教えてくれたこと』

町田市立町田第一中学校 3学年 田中 優成

じーちゃんが死んだ。四月に入院して、一度も家に帰ることなく五月に亡くなってしまった。三月まではあんなに元気だったのに。

「じーちゃん」とは祖父のことである。僕は祖父をそう呼んでいた。優しい祖父が大好きだった。祖父は生前「人生の順番でいくとじーちゃんの方が先にあの世からお迎えが来る。人が亡くなった後の儀式を経験することはそうあるものではない。だから、じーちゃんが死んだ時は、じーちゃんを教材として経験し学んで欲しい。」とよく言っていた。その時は「まだまだ先のことだろう」と、どこか他人事のように受け止めていたが、その日は急にやって来た。だから僕は悲しかったけれど、じーちゃんに言われたとおり、旅の支度、納棺、火葬、収骨、四十九日までのすべてを体験し、じーちゃんを見送った。この経験を通じて火葬場という施設を初めて知った。僕の普段の生活では決して知ることのない施設だった。そこで火葬場について調べてみようと思った。

僕の住んでいる市の火葬場は、近隣五市が共同で運営しているものだった。この五市在住の市民は無料で利用することができ、五市以外の人が利用する場合は、利用料が高額に設定されている。それはこの火葬場が、五市在住の人が納めた税金で運営されているから

だ。このように火葬場は市区町村が税金で運営している公営のものが多く、市民は無料か低額で利用できる仕組みになっている。

じーちゃんが利用した火葬場は、高温の炉が十個ほどある、とても大きく立派な施設だった。それを無料で利用させてもらっていたことを知り、僕はとても驚いた。そしてこれまで税金を納めてくれた知らない誰かに、じーちゃんを安心して見送ることができたことを感謝したい気持ちになった。

人は亡くなったら火葬場を使う。一生で一回しか使わないけれど、年齢、性別などに関係なく誰でも使う所である。しかし、もし火葬場が公営ではなく、利用料がとても高く設定されていたら、お金がなくて利用できず、困る人も出てきてしまうと思う。だから貧富の差に関係なく、亡くなった人を安心して見送るために税金を使うことは、とても素晴らしいことだと思った。

これまで僕は税と聞くと、難しくてよくわからない、大人にしか関係のないものだと思っていた。だからその必要性について考えることもなかったが、今回祖父を見送る経験をとおして、税は中学生の僕にとっても、とても関係のあるものだと思った。また、火葬場での税の使い道が、見送る人にとっては安心に繋がり、旅立つ人にとっては税の恩恵を受ける最後の機会になることを知り、税の必要性を強く感じた。

じーちゃんは僕に本当にたくさんのことを教えてくれた。ありがとう、じーちゃん。